様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 18 日現在

機関番号：３２６０７
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2011～2012
課題番号：２３７９０７０５
研究課題名（和文）　市民の新興感染症予防に関する知識、態度、行動の現状と不安との関連に関する疫学研究
研究課題名（英文）　An epidemiological study on knowledge, attitude, and actions on emerging infectious diseases among the public
研究代表者
和田　耕治（WADA KOJI）
北里大学・医学部・准教授
研究者番号：３０４５３５１７

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は一般市民における新興感染症に関する知識、態度、行動と不安との関連について明らかにすることであった。感染症についてはインフルエンザを主にとりあげ、行動についてはワクチン接種、マスク装着を対象とした。本研究ではインターネットを用いて一般市民を対象にサーベイを行った。マスク装着をする人は他の健康行動も行っていることや、今年度の予防接種をする人は、昨年度も行ったと回答する人が有意に多いことが明らかとなった。これらの結果は新型インフルエンザ等の対策においても活用できる。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study was to determine the association of knowledge, attitude, and actions with anxieties. We focused on influenza, vaccination uptake and wearing a mask. We conducted a survey through internet. We identified that people who wear a mask regularly tend to comply other health behaviors and people who are going to be vaccinated had significantly been vaccinated in the previous year. Those results could be applicable to influenza pandemic preparedness.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：社会医学・公衆衛生学・健康科学
キーワード：インフルエンザ、予防接種、健康行動、マスク、手洗い

１．研究開始当初の背景

新型インフルエンザのような新興感染症等が発生した直後は、致死率や治療の効果など不確定な要素が多いなかで、戦略的なコミ

ュニケーションや公衆衛生対応を行い、国民が過度な不安を抱くことなく、望ましい予防行動がとれるようにしなければならない

２．研究の目的

研究の目的は一般市民における新興感染症に関する知識、態度、行動と不安との関連について明らかにすることであった。感染症についてはインフルエンザを主にとりあげ、行動についてはワクチン接種、マスク装着を対象とした。これらの結果をもとに、戦略的なコミュニケーションや効果的な公衆衛生対応のあり方を示すことをめざしている。

こうした研究は、今後起こりうる新型インフルエンザやその他の感染症が流行した際の対応のあり方を検討する際に貢献することができる。

３．研究の方法

インターネットを用いた無記名の質問票調査を 2011 年 9 月に行った。対象者は 3,000 名を目標として、20 から 69 歳の男女を均等に 10 歳刻みで 300 名ずつ募集した。

質問票では、インフルエンザの予防接種歴、接種予定、マスクの装着、手洗い、うがいの習慣、運動や喫煙などの生活習慣なとについて問うた。

４．研究成果

3,129 人より回答を得た。

I.参考文献の１の研究では、インフルエンザの予防接種を行うかどうかの予測因子について検討した。

今年度、季節性インフルエンザの予防接種をするかどうかの意図と背景にある要因についてロジスティック回帰分析を行った。インフルエンザワクチン接種の意図は前年に接種したということと有意に関連していた（オッズ比（OR）:3.81、95%信頼区間（CI）：3.75 から 3.86)。世帯当たりの子供の数(OR：1.37 、95%CI：1.11 から 1.65）、および世帯収入（0-5 万ドルと比較して 5-10 万ドル OR：1.30、95%CI：1.07 から 1.54）であった。

喫煙は逆にインフルエンザワクチンの意図と負の関連を示した（OR:0.79、95%CI：0.61 から 0.98）。

本人や家族のだれかが昨年度にインフルエンザと診断されたということは、今年度のインフルエンザ予防接種の意図とは有意な関連を認めなかった。

II.参考文献２の研究

公共の場でのマスクの着用はインフルエンザを防ぐために推奨されていないが、インフルエンザのシーズン中に多くのアジア諸国で着用されている。本研究の目的は、インフルエンザ流行時に公共の場でマスクを着用することと、他の衛生習慣との関連付けられているかどうかの関連を明らかにすることであった。

参加者に前年のインフルエンザシーズンの衛生習慣を思い出して回答いただいた。ロジスティック回帰分析により、公共の場におけるマスク装着と個人の衛生習慣との関連を検討した。

3,129 人のうち 38%は、昨年のインフルエンザシーズン中に公共の場でフェイスマスクを着用していたと回答した。

公共の場で不織布製マスクを装着することは様々な衛生習慣と関連していた。頻繁な手洗い（補正オッズ比[OR]：1.67、95%信頼区間[95%CI]：1.34 から 1.96)、時折手洗い（OR ：1.43、95%CI：1.10 から 1.75)、頻繁に混雑した場を避ける（OR：1.85、95%CI：1.70 から 1.98)、時折混雑した場を避ける（OR：1.65、95%CI：1.53 から 1.76）頻繁なうがいは（OR：1.68、95%CI：1.51 から 1.84)、時折うがい（OR：1.46、95%CI：1.50、95%CI：1.29 から 1.62)、感染者との密接な接触を避ける（OR：1.31、95%CI 1.16 から 1.46)、時々感染者との密接な接触を避ける、（OR：1.31、95%CI：1.17 から 1.45)、昨シーズンにインフルエンザの予防接種をした。

結論としては、公共の場での顔のマスクを身に着けていることは、日本人の成人の間において他の個人的な衛生習慣を積極的にしていることと関連していたことが示唆された。不織布製マスクの装着自体がインフルエンザ自体を有意に予防するかどうかはまだ議論の余地があるが、追加に良好な衛生習慣を行うことによりさらに追加の予防的効果がえられる可能性がある。

III.また現在査読中の論文は、「日本の一般労働者世代におけるインフルエンザ予防接種の認識についての調査」としてまとめ以下のことが示された。

2010 年の 10 月から 2011 年 3 月にインフルエンザの予防接種を受けたと回答したのは男性 24.2%、女性 27.6%であった。インフルエンザの予防接種を受けた理由としては、インフルエンザに感染するのを予防したいから(男性 84.0%、女性 82.6%)、感染しても重症化するのを予防したいから(男性 60.7%、女性 66.4%)が多かった。

年代別の特徴として、30 代女性では他の年代と比べて同居家族に重症化のリスクの高い人がいるからと回答した割合が高かった（女性全体 31.5%に対し 30 代女性 52.8%)。インフルエンザの予防接種を受けなかった主な理由は、医療機関に行く時間がなかったから(男性 32.0%、女性 22.4%)、自分はインフルエンザに感染しないと思うから(男性 25.1%、女性 22.7%)、予防接種のための経済的余裕がなかったから（男性 20.1%、女性 23.8%）であった。年代性別で分けると、男性は 20 代から 50 代までは医療機関に行く時間がなかったからと回答する割合が高く（20 代 42.8%、30 代 33.7%、40 代 36.6%、50 代 32.3%)、60 代では自分はインフルエンザに感染しないからと回答する割合が高かった（39.2%)。

女性では、20 代は医療機関に行く理由がなかったからが一番高く（33.9%)、30 代 40 代では予防接種のための経済的余裕がなかったから（30 代 35.2%、40 代 28.6%)、50 代は予防接種によっておこる副反応が心配だから（22.7%)、60 代は予防接種の効果を信じていないから（31.0%）と回答した割合が一番高かった。年代や性別によって接種しない理由は異なっていた。労働者世代における未接種者のインフルエンザ予防接種への認識を高めるためには、性別・世代別に異なる介入を考える必要がある。

これらの結果は新型インフルエンザ等対策特別措置法に関連した対策を検討するさいにも活用できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① Wada K, Smith DR. Influenza vaccination uptake among the working age population of Japan: results from a national cross-sectional survey. PLoS ONE 8(3): e59272. 2013. doi:10.1371/journal.pone.0059272 査読 有

② Wada K, Ezoe-Oka K, Smith DR. Wearing Face Masks in Public During the Influenza Season May Reflect Other Positive Hygiene Practices in Japan. BMC Public Health 12;1065,2012 査読 有

６．研究組織

(1)研究代表者

和田　耕治（KOJI WADA）
北里大学・医学部・准教授
研究者番号：３０４５３５１７